

日記は続けることに意味がある



野田哲也展

12月3日→12月15日
ギャラリーゴトウ（中央区銀座）⑭



野田哲也〈Diary: July 10th '11〉

日本の現代版画を代表する作家・野田哲也は、自身が日常生活の中で撮影した写真を用いた木版とシルクスクリーンを組み合わせて《Diary》(日記)シリーズを展開している。この仕事は1968年からコンセプトや技法を変えずに一貫して続けられており、同年に第6回東京国際版画ビエンナーレ展で国際大賞を受賞するなど、始まりから高い評価を受けている。

「日記ですから、印象に残ったものが作品になります。それはのんびりと散歩や庭仕事をした

り、たまに旅行へ出かけたリ……身辺雑多の見たこと、感じたことの一部です。子どもが絵日記をつけるようなものでしょうか」

野田は制作のために取材旅行をするなど、具体的な行動は一切起こさない。ただ日常を過ごす中で、偶然出会った感動を作品にしている。そうした極自然な姿勢が作品に表れ、一見ありふれた静物や風景等を深く、親しみやすくするのだろう。



野田哲也〈Diary: May 25th '12, in Shanghai〉

「その時々に興味のあるものが作品に選ばれています。自分の生活に密着したことです。言ってみれば何でもモチーフになる訳です。今は対象が段々と変化してきているように感じます。例えば自画像は、必然的に対象が変わっていきま

すからね」

今回の個展に出品される約20点の内、新作は5点。美しい色彩による静物や散歩道の他、空港がモチーフとなっている作品が2点ある。ひとつは上海の空港と玩具を組み合わせた旅先の日記。もう一方は、9・11から10年経ったシカゴ空港と飛行機内を組み合わせた緊張感のある日記である。このように、同じ日記といえど、異なる野田の印象が作品それぞれに切り取られ、鑑賞者に生きることを考えさせる。「日記ですから続けることに意味がある」と語る野田は、今後も同様に活動を続けていくだろう。同展で、その類まれな画業の現在地を知ることができる。



野田哲也〈Diary: Sept 11th '11, in the United States〉